

## 天安門事件から30年： 事実より記憶

前駐日独大使 Volker Stanzel

天安門での虐殺から30年経ったが、北京では政府の論評は一切ない。これに反しドイツでは大きく取り上げられている。こういった違いが、時として不協和音を生むことになる。

報道は一切ない。慰霊もない。北京天安門で1989年6月4日発生した血なまぐさい弾圧について、政府の論評はなしだ。

ドイツでは全く違う。この日、香港から2名の活動家が下院に招かれ、天安門事件を語り継いでゆくことの重要性を証言した。この2名は、昨年香港からドイツに亡命し、庇護を求めてきたものである。ドイツは、天安門事件が、自国のこととして認識されている国の一つだ。東独の政治家 Egon Krenz は、1989年夏北京訪問に際し、中国指導部のやり方をほめそやし、ためにドイツでは、東独は中国式統治をとるのではないか、との見方が広がった。幸いそうはならなかったが、この記憶は、天安門事件の記憶と共にまだ残っている。

香港は6月4日の記憶が最も強く残っている場所であり、これには理由がある。すなわち、当地にある6月4日記念館が、先ごろ何者かに荒らされる事件が起きた。これはもう修復されたが、当館では毎年犠牲者への祈りが捧げられる。また香港には中国人民軍からの脱走者が住んでいる。さらに香港の置かれている特殊事情が、天安門事件の記憶を鮮明にさせている。中国指導部は、一国二制度にのっとり50年間にわたり自由を保障するとの英中協定を紙屑と称し、香港の自治を一枚一枚と剥いできた。香港市民が、30年前の事件を起こした政府の暴力が身近に迫るのを感じていたとしても、不思議ではない。

和解よりもまず正常化

1989年6月4日の蜂起を鎮圧したのち、最高指導者鄧小平の次の目標は、早く経済を立て直すことと、国の秩序を回復することであった。鄧の経済改革に反対する左翼グループは、鄧の「改革開放政策」を、マルキシズムの基本理念や毛沢東の偉業に反するとして、攻撃した。鄧は、このままではゴルバチョフのソ連で起こったように、党が内部から崩壊する恐れがあるとし、経済改革路線を危険に落としかねないと判断した。「二匹や三匹の蠅なら許せる」が、それ以上は駄目だ。毛時代の活動家に付け入る隙を見せれば、漸く始まった経済の活況に水を差すことになる。それどころか、党内の権力闘争において、経済改革派の人たち、例えば江沢民書記長を反対派に追いやることになりかねない。

## 事実より記憶

そういうことで、天安門事件に関するごたごたは、すべて若芽のうちに摘み取られた。例えば、今日ドイツに在住している芸術家 Liao Yiwu(「虐殺」という詩で有名)は、間もなく追放の身となった。同事件に関する発言は、やがて沈黙に変わり、今日検閲によって、同時代の人々の記憶から、消え去ろうとしている。わが子を殺された天安門の母たちの叫びは、公表されない。そしてこの4月、四川で、数名の学生が、反中国運動に加担したとして、長期禁固に処せられた。彼らは、天安門で、タンクの行進を一時止めた男の写真を配ったというのだ。この写真は、米誌タイムスで歴史を動かす100枚の写真に選ばれたもので、天安門事件の記憶が、国によっていかに異なっているか、を示している。

国はいつも、国民に降りかかった災難に打ち勝つためには、社会全体で取り組むことが必要だと言っている。チャーチルは、1946年、第二次世界大戦を振り返って、忘れることの効用を説いている。中国のやり方は、この忘れることを強制するものだ。鄧は、6月4日の犠牲者に対するいかなる追悼も弾圧した。このことで運動家を囲い込み、経済改革を進めた。いらい30年、そして今日の中国がある。厳しく監視された、一党独裁国家、新興の覇権国家、世界第2位の経済大国、ドイツの最も重要な貿易相手。ここになるまでに多くのものが犠牲になった。1989年6月4日の記憶もその一つである。

このことは、ドイツも感じている。タンクマンの写真は、記憶が国境を超えると、どのような危険を内蔵しているのか、を示す好例となった。ドイツのライカ社は、その写真を、新聞カメラマンがいかに危険な場所で仕事しているか、を示す材料として使った。ところが、ライカは、2016年以來ハイテクの巨人 Huawei 社と長期技術協定を結んでいる。なので同社は、この写真の使用をあきらめざるを得なくなった。6月4日に中国の亡命者たちをドイツの国会が招聘したのも、中国政府の不快感を招いた。これは中国に対する内政干渉だ、というのだ。抗議のため、香港のドイツ総領事館をデモ隊が取り囲んだ。

了

中戸弘之 仮訳